

書評

主権国家体系の先が見え始めてきた

高橋一生

リベラルアーツ 21 代表幹事

クリスチャン・カ ril, 「すべては 1979 年から始まった: 21 世紀を方向付けた反逆者たち」、北川智子訳、草思社、2015 年
Christian Caryl, *Strange Rebels: 1979 and the birth of the 21st century*, 2013, Basic Books

世界経済は 2008-9 年のリーマン・ショックの後遺症に依然として悩まされている。同時に中国経済の下振れや米国連銀の利上げの動きにも振り回されている。市場原理主義がいろいろな形をとりつつ我々の日常生活に大きな影響を与えつつあり、今後もその猛威を無視できないのであろう。

他方、2015 年はパリの「シャルリ・エブド」襲撃で始まり、11 月のパリ同時多発テロへと拡大。その間、レバノンでの自爆テロ、エジプト上空でのロシア航空機のテロによる破壊、バンコックでのテロ、ナイジェリアにおける恒常化しつつあるテロなどをはじめ世界各地でテロが発生し、アフガニスタンやイエメンの内戦は悪化の一途をたどっている。「IS」を中心としたイスラム過激派がこれらすべてに関与している。

著者カ ril は 21 世紀を特徴づけるのは市場原理主義と宗教原理主義であり、それらもたらす地球社会へのチャレンジであるとし、その両方とも 1979 年に震源地がある、と指摘している。その年をめぐり世界に決定的影響を与えた 4 人の人物の思想と行動を分析しているのがこの本である。市場に関してはマーガレット・サッチャーと鄧小平、宗教に関してはホメイニとヨハネ・パウロ二世。彼らの生い立ちから教育、さらに活動を展開していく様子を時代背景とともに見事に描写し、彼らの生き生きとした姿を描いている。

著者はアメリカのジャーナリズムの最も良い伝統(学問分野を大胆に横断し、足で現地を精査し、磨かれた感性を重視する)を引きついで、新進気鋭のインディペンデント・ジャーナリスト。ニューズウィーク東京支局長も務め、その際もこの本のテーマを温め続けていた模様。

サッチャーの特徴を次のように指摘している。「一般に政治家は自分の計画を持っている。八百屋の娘が持っていたのは、使命だった。」(p.227) フィッシャーが 1955 年に設立した経済問題研究所 (IEA)、さらにその淵源として 1947 年にハイエックが中心となって創設したモンペルラン ソサイエティがその「使命」を政治アジェンダにしていくのに大きくかかわっていく様子を描いている。第二次大戦後の「ゆりかごから墓場まで」という労働党と保守党両政党のコンセンサスを覆す政治アジェンダである。ハイエック

の思考における責任感の重要さの指摘は松尾匡「ケインズの逆襲、ハイエックの慧眼」PHP 研究所、2014、が見事に描いている。

著者は日本語版への序において次のように述べている。「中国の新しい指導者、鄧小平は、日本にならって強力に近代化を推進し、世界に門戸を開放したいと側近に語っていた。1978年に東京を訪れた際には、中国はまさに劇的な変化をとげようとしているとほのめかしたが、日本側の誰もこの言葉を真剣にはうけとめなかった。」1920年にフランスに渡った鄧小平がそこで知り、生涯愛したものが3つある。「サッカー、クロワッサン、共産主義」同時に、鄧小平は生涯「生き延びる達人」であり、「現実主義者」であった。最後まで近代化を進めるための市場の力と「共産主義」の両方を追い求めていた鄧小平の姿は多分に彼の気質に依っているらしいことが見て取れる。その両者を追及しつつ政治システムが転換し、現在に至り、さらに今後を見通そうとする試みは天児慧「中国共産党」論 NHK 出版、2015、が優れた分析を提供している。

1903年わずか生後5か月の時に、高名な宗教学者の家系で尊敬を集めていた父親が当局者によって殺害されたホメイニが、社会に対して反抗的なものを内在しつつ成長していったであろうことをうかがわせることから彼の生涯を描きはじめている。イランのシャー パーレビの推し進める急激な近代化路線に対して「羞恥」の概念で対峙し、シーア派を基盤とした革命を起こすホメイニの思想の展開と彼の国外追放を含む当局による迫害のプロセスを見事に描いている。宗教と政治のかかわりについて賛否両論があった神学論争で、その両者の密接なかかわりを徐々に体現していく様子が明解に分析されている。その革命の世界にもたらす重要な意味合いはパリ政治学院教授ジル・ケペル（朝日新聞 2015年10月20日、朝刊）に詳しい。

1978年10月16日にシスチーナ礼拝堂の煙突から白い煙が立ち上がり、新教皇の名前がカロール・ユゼフ・ヴォイテイワと発表されると、サン・ピエトロ大聖堂に集まったジャーナリストや信者たちは、「それって誰？」と戸惑いを隠せなかった。ポーランド出身のこの教皇が世界を駆け回り、共産圏におけるキリスト教の覚醒を通じて、冷戦を終結させるのに大きな役割を果たし、さらに世界の世俗化に対抗する基盤を築いた活動を著者は見事に描いている。政治と宗教のかかわりについてのヨハネ・パウロ二世の賢さは新約聖書におけるイエスを彷彿させる。この展開の米国への影響については森本あんり「反知性主義：アメリカが生んだ「熱病」の正体」新潮社、2015に詳しい。

21世紀の展開を宗教と市場からとらえ、その淵源を4人の反逆者を通じて描くこの著書は、今を生きる我々に多くの考える材料を与えてくれている。人と社会の関わり合いを通じて描く現代史は読み物としても実に楽しい。今後の知的フロンティアの一つはこの2つの要素の相互作用を核に据えた地球社会のドラマの分析なのであろう。そのための才能が切実に求められている。